中川根ふる里通信

＝ 第83号 ＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313
静岡県榛原郡川根本町上長尾859-6
TEL 0547(56)-0015 FAX (56)-0020

新茶とＳＬ
川根本町崎平にて

上原ひろみさん ニューヨークから日本へ 贈られた曲は、「グリーン・ティー・ファーム」

今年になって、いろいろな出会いがありました。紹介してみましょう。

※二月十九日午後十時NHKテレビ「プライング10」より

テーマは『ピアノ』楽器の町浜松でのピアノの歴史などから、最新の設備が紹介されているうちに、スタジオのピアノが、ひとりでにメロディを奏でました。

『これは今、この時間にニューヨークで弾いているのですよ。』映像と音声はともかく、スタジオのピアノの鍵盤がひとりでに動いている不思議な光景です。『ニューヨーク？もしかしたら上原ひろみさんかも知れない。』と、胸をはずませて見ていますと、やっぱりジャズピアニストの上原ひろみさんでした。

上原ひろみさんは、浜松市出身の、今は煌めくジャズピアニスト。浜松から世界へ羽ばたいた上原さん。現在活動拠点をニューヨークに移して、活躍しています。

実は上原さんのお父さん上原貞夫さんは、久野脇字三津間出身です。この時演奏された曲『グリーン・ティー・ファーム』は、川根の美しい茶畑を想い、作曲されたのでは？と思いました。又、昨年末来世へ旅立たれたやさしいおばあちゃんへの贈る奏べだったのかも知れませんね。

これからも、テレビや音楽会で上原さんに逢う機会がありましたら、応援して下さい。増々の活躍期待しております。

※二月十一日『ふる里のつどい』より

三連休の貴重な一日、『ふる里のつどい』に、大勢の皆さんが参加して下さって、楽しい交流会となりました。

会場の寸又峡温泉は、例年この時季積雪が心配されるところですが、正月から続く暖冬で、春のような温かさ、早咲きの梅の花も会場や名札に添えられました。

約五時間のつどいは、あっと言う間に終ってしまい、参加した皆さんの心を満たしたかどうかは心配のところで〈

寸又の地蔵杉・寸又川支流大間川の中流に、天をあおいで堂々と、立っていると言う。根元に立っている人が、地蔵杉紹介者の谷田部さん

↖すが、自己紹介には、たっぷり時間をかけました。それぞれの皆さんのメッセージを紹介できず、残念ですが、少し、紹介させていただきます。

◎湯山出身の滝浪登さん、「大寸又・湯山・東側集落」のお話は、歴史教室そのもの、貴重な資料もいただいてありますから、又、ふる里通信で、発表させていただきます。

ふる里のつどいの記念写真・撮影は徳山の西原照夫さん(左側)

◎千頭営林署へ四度赴任された谷田部英雄さん、川根本町民よりも千頭山固有林の事はご存知で、前回出版物紹介"千頭山がたり"の著者、今回は探査された"寸又地蔵杉"前ページの保護を熱く語った。

◎下長尾出身の中野唯司さんは、ふる里通信創刊からのおつきあい、関東川根地区会企画、ふる里ウォーキング参加等々、今回も『足が痛いから……』をおして、参加して下さいました。

↑上長尾診療所の油谷先生(本を見ている方)と奥さん(スピーチしている方)は急患診察の為、記念写真には間にあいませんでした。急患の方は同級生(山沢の)で、幸い命を取り止めました。本当によかった……。

◎"大井川を見つめて八十年"の山田節さんも、大井川への思いを熱く語って下さいました。

そして、ご無理を承知で、ここうよく会場を提供して下さった、翠紅苑の望月孝之さん、お父さんの望月恒さん、ご協力ありがとうございました。又、いつの日か、ふる里のつどいを計画したいと思います。

紹介者(敬略)

北島享
望月孝之
望月恒一
竹本睦
谷田部英雄
田中一
根本有
羽田恭
松本匠
山沢節子
藤本都子
山田節
太田瑞枝
大村智男
中野唯司
梶山俊雄
滝浪登
松本修
中道正
西村栄司
鳴嶋宏
西原照夫

※二月四日、「大井川の再生を考える集い」
私たちは『今！何ができるか？何をすべきか？』
――五十年前の大井川は魚が棲み、子供達の歓声がひびき、流域をうるおし、海を豊かに、砂浜を生みました。――の再生を実現するために、今、私たちは何ができるか、何をすべきか。――来年の七月九日には、上流部井川発電所、川根本町内の奥泉発電所の水利権の期限が迫って来ます。支流関ノ沢、寸又川支流黒代川からの取水もあり、水無し川が長年発生している為、期限までに、地元として、大井川の再生を強く、訴えて行かなければなりません。

※二月十七日、徳山出身、お茶の伊藤園副社長橋本さんを囲んで、今、緑茶ペットボトルの売れゆきは、うなぎ登りに、売れに売れていると言う。その頂点が、"おーいお茶"の伊藤園、その副社長が徳山出身の橋本さん。大出世された方を同級生の太田起博さん達四季の会が茶若館に招いて、"川根茶の将来と、世界の茶、大企業の茶"を語る会を催し、会場一杯の人が集まり、熱いお茶づくりの話しをしました。

※二月十八日、"明日の大井川流域を考える"
「地名発電所の産業遺産としての活用を考える」
旧東海パルプ地名発電所は、大井川水系で一番始めに建設された発電所で、昭和三十六年廃止になるまで、地名地区に大井川の流れを導入して、発電をしていました。この建物を、『どうすればいいのか…』と、地元選出の国会議員原田さんも加わり、熱心に討論しましたが、決論は出ません。貴重な文化財ですから、何とか、保存されるといいのですが。

どう築くか、誇れる上流圏。

全国まちづくりフォーラム in 奥大井

日本上流文化圏特別会議 2007 川根本町

全国にいらっしゃる、川根本町出身の方、川根本町をふる里と思っている方へ、
参加者を募集しております。
参加希望者には、くわしい内容をお送りします。
お早目に、ふる里通信係か、TEL 0547-56-0015、428-0411、榛原郡川根本町千頭1216-21
川根本町まちづくり観光協会までお知らせ下さい。
TEL 0547-59-2766.

＊……＊……＊……＊……＊……＊……＊

第1日 9月7日 わいわい がやがや 奥大井を楽しむ日
＊川根本町 新お宝発見ツアー（3コース）
・寸又峡渓谷探訪・長島ダム探訪・文化山ハイキング
＊温泉談義 …… 会場 寸又峡温泉
＊歓迎レセプション 会場 寸又峡温泉

第2日 9月8日 かんかん がくがく 奥大井を考える日
午前9時～ 奥泉 元北小学校
＊スライドショウ「ふりかえれば未来」
＊基調講演「奥大井に活力を甦らせるもの」 竹内 宏
＊"そしてこれから"分科会（5会）・あすの夢をかたちにする。
・環境いかに守り育てるか。・きらめく景観を磨きあせ。
・郷土の誇りを取り戻そう・逞しい地域力を醸成する。

とき、2007年9月7日（金）～9日（日）
ところ、榛原郡川根本町、奥泉元北小学校、寸又峡温泉・茶若館
参加費 3日間で5,000円（1日、2日参加の対応も可能です。昼食代2回、交流会費・資料代・宿泊費は別途）

第3日 9月9日 ぐんぐん いきいき 全国へ発信の日
午前9時30分～
フォーレなかかわね茶若館
＊おみやげ会議第1部
＊特別講演『日本の自然・文化・生活』
川勝平太（静岡文化芸術大学長）
＊おみやげ会議第2部

ふる里川根本町の姿を、この機会に是非ともご覧下さい。

奈良間辰夫先生逝く

いつになく温かな立春、この日に奈良間さんは、来世に旅立ちました。九十六歳、明治四十五年生まれ、大正・昭和・平成三代を生きぬかれた奈良間さん、教師人生三十年・司法書士人生四十年、九十歳までお仕事をされておられました。（左写真は、九十歳の奈良間さん）その後は、奥さんと二人静かな生活をおくられておられました。まさに誠実を貫き通した人生"巨星墜つ"を感じました。

翌五日、徳山コミュニティセンターには、別れをおしむ人々が集まり、大勢の人々に見守られて、旅立って行きました。ご冥福をお祈り致します。

ここに、奈良間さんの足跡のほんの一部とは存じますが、お別れを皆さんにお知らせすることといたします。

櫻と學校　―中川根村弘報―昭和三十二年五月一日発行

『藤川小学校長、奈良間辰夫先生プロフィール』

藤川とは大井川をへだてた真向いの徳山村堀之内出身。広く知られる司法書士奈良間満寿蔵氏の次男である。

センセが南壺二十三年になるが、その間志太側ばかりを歩いていて本村転任は始めてとのこと。地元の徳山小学校には累計十三年の勤続経歴をもっている。

花を作ることが好きで、徳山小在勤中、校舎の周りを花壇で埋め、いまでも訪ねると四季おりおりの花が芳醇な香りを放ち、一面に美しく咲き乱れている。

それ程ではない、と自分の趣味をケンソンされるが、やはり、作っていると自然に愛情が湧いてきて、立派な花を咲かせたいという気持ちになりますね。そして、美しい豊かな情操を培ってくれます。子どもたちにもそういう気持ちをもってもらうように……」と、静かな調子で語られる。

「何よりも職員の"和"ということを尊重していきたい」というのが先生の抱負であるが、花を愛する先生にふさわしい一つの教育観といえよう。「和をもって尊しとなす」というのが先生の信条のようである。

藤川と堀之内とはいろいろの点で共通な面が多い。文兄や生徒のもっている地域的性格というようなものも、おおよそ似通っているが、その点についても遠くから転任された先生と違って、何かのポイントをつかんでいられるようだ。最近太ったそうだが、アルコールのせいではないという。

静かな物腰、温厚な風貌。堂々たる校長タイプである。（ほとんど原文のまま）

写真は昭和三十四年中川根中学校長。

勲五等瑞宝章受賞―ふる里通信56号より

奈良間さんは、昭和八年静岡師範学校専攻科卒業、同年四月より志太郡東川根尋常高等小学校訓導を命ぜられてより三十年間、主に榛原郡北部地域に勤務し、山間地の教育向上に常に誠実を念頭に率先垂範して教育に専念されました。

特に終戦前後三年間の志太郡笹間村国民学校でのへき地教育においては、日常生活に困苦の中、師弟一如の労働教育を通して、児童の育成に大きな成果を上げ、地域の人々の厚い信頼を得ると共に、地域住民に生涯忘れることの出来ない感銘を与えました。

奈良間先生が赴く所、常に四季を彩る花壇づくりをとり入れ、咲き誇る花の美しさに、多くの子供達が心を洗われ、美しいものや、自然に対して感動する素直な心、生命を尊重する心、他者への思いやりの心をもった人間として成長してくれることを強く願い、花壇づくりを教育の一環として実践されました。こうした真摯な、しかも地域に密着した教育理念は、常に父兄から信頼され、また教育界にも大きな影響を及ぼしました。

常に地域に根ざした教育の発展を願い、時代のすう勢をよく見極め、自己の勤務態度には厳しく、職員に対しては教師個々の特性を生かしながら、勤務への熱意と確かさを求め、指導力向上の研修を勧められました。いずれの奉職校においても先生の誠実な人柄と地域に密着した教育理念は、部下職員を感化し、多くの優秀な後継者を輩出しました。

昭和二十八年四月から校長職に任ぜられ以来退職するまでの十年間、小中学校長として児童、生徒の教育にあたり、美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性、自主心、自己抑制力、責任感などの育成を大切にして経営にあたられました。この間、町教育会においては会長として教育の振興に努め、山間地の教育に大きく貢献されました。昭和三十八年は、町内の中学校二校（中川根中・徳山中）が統合された年で、統合推進に寄与し、統合を目前にして退職されました。常に誠実で卓越した教育理念をもって、教育一筋に取り組まれた功績は、誠に大いなるものがあったといえます。

――資料提供・中川根町――

奈良間先生の事を、『やさしい先生でした』と言う人と、『厳しい先生でした』と言う人に二分されるような気がします。その比は三対二位かな。ふる里通信発行には、最大の理解者でした。その御恩に答える事なく、来世へ旅立たれてしまい、本当に申しわけなく思っております。

中川根弘報第17号、二面に奈良間先生、三面に、あの懐しい"ふる里夜話"の原田耕作さんの寄稿がありました。お届けします。

「晩霜寸筆」＝原田園主人＝瀬沢

花過ぎて吉野出る日や忘れ霜　凡董

春の霜は昔から美しく歌や句に詠まれているが、茶業農家にとってはこの上ない災危である。

梅の花が一度に咲き揃わないで、先に咲いた花が汚く散りかかるころに、遅れた蕾がまたあとを追って開き、あたかも二度咲いたかのように見えることを、昔から梅の二度花と呼び、こんな年には別れ霜があると云い伝えられている。気がついた人もあったと思うが、今年は二度花であった。果して晩霜があるかどうか、この云い伝えだけはぜひはずれてもらいたいものだ。

ところで、今一つ晩霜を予知する方法は、大無間山の残雪をみることである。大無間山は知られる通り、上川根村と井川村の境界にあたる高山で、中川根の南部では、至るところで望見される。この山の南面の谷間にほんの少しでも残雪が見えると、どんなに暖かく、汗の出るような日が続いても、必ず気候が急変して降霜をみるのが例だ。大無間山に雪がなかったら、晩霜はないものと思ってまず間違いない。

晩霜予防の菰掛けは、たんに霜だけ防ぐつもりなら茶株の中に先端をとがらした棒を立てて、これに菰を引っかけるとよい。とがった先に菰がささって、風が吹いても舞う心配がない。茶株に直接かけるのはよくないようだ。与治の玉露茶は、毎年の降霜に困ったあげく、コモやヨシズを覆

って霜を防いだ結果生れあたものだそうだ。
災転じて福となすよう川根の農家も一層工夫をなすべきであろう。

編集室より

昭和五七年十月発行、町制二十周年記念で全戸に配付された"広報なかかわね謄刷版"は二十余年経た現在も座右の書の一つとなっています。
奈良間先生の訃報をお知らせしようとした時も、『確か載っていた』とひもといてまいりますと、ありました。そして、次のページには、原田耕作さんの健筆がありました。もう五十年前の事です、村名も変っています。でも当時の紙面のまま、お届け致します。　加えて、広報なかかわね謄刷版発行当時の町長徳嶋淳男さんの言葉もお届けします。

"町制二十周年記念を迎えて"

昭和三七年四月一日町制施行以来、満二十年を迎え、成人に達しました。この間多くの先輩諸氏の教訓とおかげ添えによって、現在の中川根町の成長をみるに至りました。
当時の人口は一〇、六二九人、世帯数は二、〇〇五世帯で財政は一般会計歳出決算一億六千十五万四千円でありました。
現在は人口八、二六〇人、世帯数は一、九九三世帯、財政は十七億九千四百七九万七千円となっております。
昭和四十年代における高度成長期は、農山村の社会機能に大きな変化をもたらし、都市の工業開発は目覚しい進展を遂げるにつれ、労働力の都市流出を招き、一方においては生活様式は都市並に変り、行政施策の対応も急速に拡大して参りました。
予想もしなかったモータリゼーションの発達は、生活にも大きな変化を助長し、交通基盤の整備が当面の大きな課題として、道路の改良整備、舗装化を促進して参りました。
また、地域産業の振興、教育文化の向上を図る学校教育の充実、社会教育の振興、スポーツの振興等、二十年間の歩みの中で、数々の進展をみたのであります。しかし四十年代後期から第一次、第二次のオイルショックにより、日本経済も世界経済の動向とともに大きな打撃を受け経済高度成長から低成長への移行となり、堅実な財政運営を迫られる現状となったのであります。
小さな財政力で効率的運営を期するため、これから二十一世紀に向けて山村のもつ役割を果すためには数々の難題が山積し、過疎化現象による人口の減少、特に若年層の流出は、高齢化社会の進展に一層の拍車をかけ、地域産業振興上にも多くの対応策を迫られております。今までの二十年間の推移を十分認識して、これからの将来像について計画的ビジョンを打ち出さなければなりません。それには町民一人一人が、これからこの町に定住するため、智恵を出しあって方向づけを図らなければなりません。
ここに、町制施行二十周年を迎え、現在までの町の移り変わりを記録した広報紙謄刷版を発行することになりました。これまでの歴史を基礎として、新しい町づくりの参考になれば幸いと存じます。

以　上

そして四年後、ふる里通信は創刊され、巻頭のことばを町長の徳嶋さんに寄せていただきました。それから、四半世紀中川根町は平成の合併に巻き込まれ、川根本町として、新たな出発を致しました。広大な山林を有する、我が国の環境面で命を生み出す町となりました。

"花のたより"冬から初夏へ

榊 哲明さん―花おりおりより―

冬の章『しもばしら』

竜爪山の中腹で「しもばしら」を見つけることが出来たのは、平成十七年のクリスマスイブの日のことです。しばらくはこの日のことを忘れられそうにありません。

その日は、頭の芯まで痛くなるような冷え込みの強い日でした。穂積神社付近で、しばらく歩いた薄暗い斜面で、真綿菓子のような白い塊を見つけました。条件が揃ったのか、ようやく「しもばしら」の"花"が咲き始めたようです。カビ臭い地面に這いつくばりながら覗き込むと、からみ合った茎の根元に青白い氷の塊が創られています。

平成18年12月30日、竜爪山・穂積神社周辺にて

樹氷に似たもの、リング状のもの、木の葉の形をしたものなどさまざま。それらは白く濁った薄い氷で出来ていて、軽く触れればすぐに壊れてしまいそうです。どれもこれもがとても幻想的で、寒ささえ我慢できれば、いくら見ていても飽きません。

図鑑などの解説によれば、シモバシラ（しそ科）などの秋咲き結実する草花は、花が落ちてもまだ根や茎は生きています。そのうち厳しい寒さが訪れると吸い上げられた水分が凍りつき成長を始め、やがて美しい氷のオブジェが創り出されるわけです。

「しもばしら」は冷え込みが厳しければ標高にあまり関係なく、一斉に"花開く"感じです。驚きと感動を与えてくれる氷の造形は、細い茎が裂けて創られるものです。一度"咲いて"しまえば、もう水は吸い上げられません。その冬一回限りの、草と水と寒さが創り上げる総合芸術作品と言えるかもしれません。

早春の章『ふくじゅそう』

雪解けの季節が訪れて来ると、どこかの山あいでフクジュソウやセツブンソウが蕾を開き始めているのではないかと気になってきます。名前からしてユキワリソウも、同じ時季に見られる花とばかり思っていましたが、花期はもう少し遅くなってからであることがわかりました。

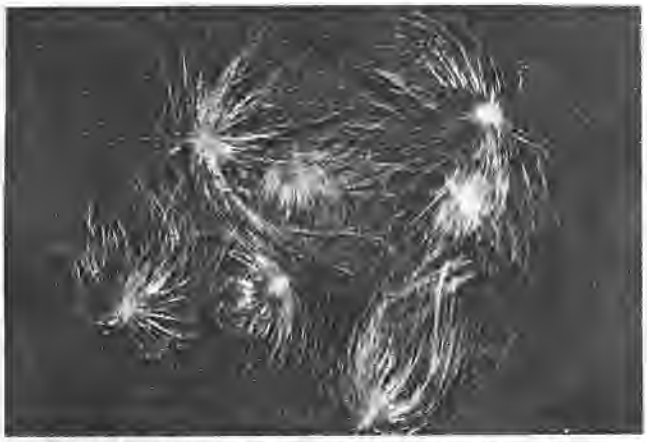
いづれにしても たくさんの草花に先さがけて花開くのですから誇らしげに咲いているのに違いありません。雪原の一角で毎年繰り広げられる早春のドラマを身近で見られる人たちは幸せです。

平成18年2月　掛川市龍尾神社にて

龍尾神社（掛川市）には梅園があり、植えられているもののほとんどが"しだれ梅"で、梅園の中でも珍しい存在と言えるでしょう。見ごろにはまだ早い立春前、下見と兼ねながらおかけてみますと、園内の四隅をレンガで囲まれた陽だまりに、光沢のある背の低い黄色の花が目に入ってきました。誰が植えたのかフクジュソウです。

春の章『綿毛』

お正月の寄せ植えなどでは見たことがありますが、地に植えられているものを見たのは初めて、わずかな株数ですが、まるで自生のものを見つけたような感激です。そして、フクジュソウの自生地のひとつである姫川（長野県）源流を想い出しました。



平成19年3月 キジョランの種子 小笠山にて

平成19年3月 オキナグサ、佐久間町・浦川にて

小笠山へコモウセンゴケを見るために出かけた折りのことです。山裾の陽だまりで5cmくらいの美しい綿毛を二つ見つけました。光沢のある大きな綿毛の中心には、薄く乾いた柿の種の様な種子がついています。どんな植物から放たれたものかとても気になります。

そして今年も三月のはじめ訪れてみたところ、枯れ枝や若草の根元にいくつか見られます。黒をバックに綿毛を置いた写真のイメージが膨らんできたので、できるだけたくさん集めることにしました。が、簡単に見つけられるものではありません。

山あいに風が吹き始めると、風上からタンポポなどの綿毛がたくさん飛んで来ます。少し逆光気味で見上げていると、それらのひとつひとつがとても鮮明に見えます。ひときは大きなこの綿毛を探し出すのは簡単なことで、落ちる方向を確認しながら歩き着地を見届けてから小走りに駆け寄り、形が崩れないように注意して拾い上げ、ビニールの袋に入れているうちに、十五個ほど集めることができました。

持ち帰った綿毛を見ているうち、〝ケサランパサラン〟のことを思い出しました。それは何かと聞かれても困りますが、幸運を呼ぶ謎の生き物とでも言いましょうか、植物の種のようでもあり、毛をまとった生き物のようでもあり、その実体はわかりません。綿毛のような白い塊で、食べ物は白粉（おしろい）、桐の箱に入れ大切に育てていると幸せが訪れ、やがて同じ綿毛をもつ小さな子供が生まれるそうです。ここまでくると童話の世界に入ってしまいますが、夢のある楽しい言い伝えです。

苦労して集めた私の綿毛もコルクの蓋のついた広口のガラス瓶の中に入れ大切にしまってあります。今のところ子供を生むような気配はありませんが、何の種子なのか、是非知りたいと思っています。出来上がった写真を手掛かりにしっかり調べるつもりでいますから、その放し主がわかるのも、そんなに遠いことではないと思います。

そして、間もなくキジョランの果実から放たれた綿毛であることがわかりました。図鑑で見る限り、ごくごく地味なツタの仲間です。多分、カラスウリぐらいの大きさの果実が割れ、飛散したものなのでしょう。〝海を渡る蝶〟としても有名なアサギマダラの幼虫の食草にもなっているそうです。「この美しい冠毛を『髪を振り乱した鬼女……』に見立てて名付けられたそうですが、そんな恐ろしさなどはどこにも感じられません。

盛春の章『ハルリンドウ』

桜の花便りが話題にあがる頃になると、親しい花友達から毎年のようにハルリンドウの話を聞かされます。熱の入ったその話ぶりについつい感化され、いつの間にか見つけたい花のひとつになってしまいました。

ハルリンドウ・中山峠（掛川市）

キンラン・中山峠（掛川市）

時季の訪れを待ちかねて野山に繰び出してはいるものの、そう簡単に見つけられるものではありません。

そんななか、草花に詳しいKさんから、火剣山（掛川市）の周辺で見られる旨情報をいただきました。登り口近くで茶店を開いている「扇屋」の奥さんの話でも、昔は何処にでも見られるごくありふれた野の花だったようです。

ようやくその姿を見つけ出せたのは、昨年の四月始め、茶畑から続くなだらかな斜面にびっしりと咲いています。茶畑の根元にでも敷いたのか、自生地周りのヨシや笹のたぐいはきれいに刈り取られていました。本道から外れた農道沿いのため、被害に合わず生き延びてこれたようです。秋のリンドウとはイメージがだいぶ違い、背丈は低く品の良い紫色の花は、山里に春を造げるのにふさわしい花です。

その後、2kmほど離れた山あいでも見つけることが出来ましたが、数は少なく、比べてみると少し遅咲きのようです。

ハルリンドウの自生地には驚くことにキンランも見られ、生息場所を仲良く分け合っています。憧れていたランの仲間が、こんな身近な山里で見られるなんて、思いもよらないことでした。幸運の出会いと言うのはこんなものかもしれません。ぽつんぽつんと十株ほど。ランの気品は感じられるものの、蕾はへい開することなく、わずかに開いたすき間の奥から唇弁らしきものがのぞいているだけで、少し物足りなさを感じました。

「花おりおり」島田市金谷河原一四ロ三ノ二
榊　哲明さんより、届けられた、花だより は、見たこともない、しもばしら、キジョランの種子、目を見はる、ハルリンドウ、キンラン、の色彩の美しさ、何とも言えない、安らかな、いい気持ちになる便りです。色彩が送れず誠に残念ですが、皆さん想像されて、ご覧いただきたくお願いします。

フズの葉、痕

覗く愉しみ

藤枝市　野口正武

高校の授業相談に乗るスタッフの一員として、昨年四月から県中部地区を回っている。授業を覗いたり校内を行き交いながら、これまで気がつかなかった生徒たちの様子を知って、すがすがしい気分にさせてもらえることがある。

過日、川根路の高校を訪れた。

どの授業でも、先生たちのさまざまな工夫に生徒たちが素朴な前向きの姿勢で応えている情景が印象深かった。それよりももっと心に残ったのは、生徒たちの挨拶の様子である。

授業の始まりと終わりに生徒と先生の間で交わされるそれが、実に丁寧なお辞儀で、しかも大きな声でなされているのだ。また廊下でも、ほとんどの生徒が若者らしく気持ちのよい挨拶をしてくれた。

訪問して校内の概況の説明を受ける時など、生徒の挨拶のでき具合を誇らかに報告してもらうことがある。なるほど、廊下ですれ違う時など、とてもはきはきとした態度で応対されるのだが、肝心の授業時の挨拶で満足できる学校は意外と少ない。

それがこの高校ではすべての場面で好ましいはずだと十分予想できて、心強く思ったのだ。それに、生徒と先生たちのこうしたやりとりについて、取り立てて事前の説明を受けなかったことが、密かな誇りを際立たせているようで、頭が下がった。

現役教員の頃、学校の最も真剣な場面である授業でこそ、双方の取り組みの気持ちを伝える挨拶がしっかりされなければならないと心得ていたから、とくに授業の始まりなど、それらしくできるまでしつこく促していた「変人」には、自分の方針が改めて認められたような気がして、心が温まるのを覚えたのである。

ところで、校内のあちこちで生徒と挨拶を交わしながら、心が洗われることもある。そんな話を一つ二つ紹介しよう。

今月始めに県都のある高校へ出向いた時のことである。そこは、いわゆる中堅校で、目下耐震工事の真っ最中。ここしばらくは、職員も来客も生徒と同じトイレを使用することになっている。

ひと授業の参観を終えた休み時間に用足しをした。入れ違いにえらく図体の大きい男子生徒がやって来た。手洗い場へと踵を返すと、床に散っている皺くちゃの紙屑が一つ目についたので気になり、拾い上げて片隅のゴミ箱に放り込んだ。手水を使っていると、用を終えたその生徒が背後から近づいて来て、きまり悪そうに腰を屈めてこう言った。「先生、どうもすいません。」

こちらが教員風情の客の一人だとは見当がつき易かったのだろうが、「今時の若者」からにしては、全く予期せぬ反応だったので、正直びっくりし、一瞬の後気持ちは自然に熱くなった。そんな大男から発する、年寄りに感謝しかも己を反省する弁である。

授業に関するまとめの報告を校長にする際、余談ながらと、このことについて所感も込めつつ伝えたのは言うまでもない。

それより半年も前、さる専門高校を訪れて、得も言えぬ衝撃に打たれたことがある。

帰りがけ、階段にさしかかると、丁度技能員（用務員）が掃除機をかけているところだった。二階から一人の男子生徒が降りてきて、仕事中の彼に向け、「おじさん、ありがとうございます。」と突然の感謝とねぎらいを込めた声をかけてきたのである。

予期せぬ光景にジーンときて、とっさに、「きみ――、何て名前？」と尋ねてしまった。そして、その生徒から返ってきた返事に思わず脱帽したのだった。「いやあ、名乗るほどのもんじゃありません。」

自分がこの歳で聞きかじった披露公の故事など知らぬ若である彼の反応には、まさに天性そのものゆとりとユーモアが滲んでいた。

（平成十八年十一月二十二日）

野口先生から原稿をいただいたのは、昨年晩秋でした。半年後の記載となり、何とも申しわけなく思っております。

出会の場は、川根高校応接室。以前ふる里通信第64号より「お茶」をテーマに七回に渡って寄稿下さいました高校時代の恩師石塚幸男先生から「川根高校へ行くから。」の電話があり、昼休みに逢いに行った時のことでした。

平成十七年度から県教育委員会高校教育課で、コーチングスタッフが設けられ、高校教師経験の皆さんがコーチとして、各高校を訪問するシステムができ、この時も三人の先生が来校されていました。川根高校はいい評判で、安心しました。コーチングスタッフの先生方はどこかの高校の校長先生だったのでしょうね。

東京のかたすみから（五一）
テレビの始めから終わりまで
最近の事故で思うこと

渡邉　實夫

昨年八月十四日、クレーン船が電力線を引っ掛け、東京都内が大停電となった。十一月二十一日には、海上自衛隊の潜水艦が浮上訓練中にパナマ船籍の大型タンカーと海中接触事故をおこした。水道管事故は相変わらず絶えないが、地中のことと、やや無神経になっていたが、いよいよ空中や海中事故もかと気になっている矢先のことだ。

そして十二月二六日、基準より低い電線で、女児死亡のニュースを見た。（右、読売新聞参照）私も在職中のヒヤリ・ハットとしたことを次から次に思い出した。

ヒヤリ・ハットとは、一歩間違えば、とんでもない事になっていた出来事である。それらは、とんでもない事を起こす恐れのあるちょっとした出来事であり、そのことに出くわすとヒヤリとしたりハットするのである。

（前三種郵便物認可）　2006年(平

「低い電線」269か所
IT化影響？ 半数は無断設置
横浜市調査

横浜市旭区の市道で11月、トラックに積まれた重機が「高さ4メートル50以上」と定めた市の道路占用許可基準より低い電線に引っかかって街路灯を折り、直撃を受けた一歳の女児が死亡したことを受け、横浜市道路局が調査したところ、基準より低い電線が269か所にのぼっていたことが25日、わかった。このうち、市に無断で設置されたケーブルや電線などが半数以上を占めていた。

事故は11月7日に起き、市道路局は翌3日、県警から現場の電線が基準より低いとする指摘を受けた。このため、市は翌5日から市内18の土木事務所を通じ、商店街や通学路など人通りが多い場所から順に市道上を横断している電線について緊急点検した。

その結果、市の基準に満たない電線は269か所だった。調査が終わっていない地域もあり、さらに増えるとみられる。このうち、所有者が分かったのは72か所で、判明分についてはは早急に是正するよう指導した。所有者や設置者など分からない電線は、市土木事務所へ許可申請書を提出しないまま無断で張られていた。

市道路局は、IT（情報技術）化の進展によりインターネットや映像の送受信などを反映し、ケーブルテレビや通信回線、光ファイバーなどの設置に関する問題が急速に強んになったとこという。

市道路局の員相真先管理課長は25日に会見し、「結果として基準以下の物件が存在したことは、道路管理者としての責任があり、申し訳ない思っている」と謝罪。電線などの設置後に完了届出書を行うことを明らかにした。

また、調査結果を公表していなかったことについて「行政として責任を負う必要があったが、関係者は考えていなかった。隠したつもりはない」と話している。

市道路局は、死亡事故の際に引っかかった電線と同じ防犯カメラ用などが多くあることを調べ、調べている。すでに使わなくなり、放置された電線もある。

また、ヒヤリ・ハットすることがないように、常日頃から気を使ったり、対策を立てておくのである。それでもヒヤリ・ハットしたことがあると、三百人がヒヤリ・ハットすることがあるというアインリッヒの法則）

これまでに体験したヒヤリ・ハットや事故防止の対策などの事例を書いてみたい。

★技術部勤務のころ

電々公社（現在のNTT）およびテレビ各局のテレビケーブルが地下埋設されている六本木交差点で、工事中切断事故が起きた。定例会議の席上、TRC（東京テレビリレーセンター）の幹部がわれわれテレビ局員に最敬礼して、誠に申し訳なかったと謝罪した。今では日常化したが、えらい人のこのような光景は初体験である。

東京湾東雲のヘリポート基地の契約検査に行ったとき、夜間照明設備のないヘリポートは昼しか飛べないことを改めて知らされた。当時、夜間飛べるのは羽田空港しかなかった。

多発するヘリコプター事故対策として、地上五ロメートル以上しか飛べない。事件現場（ワンポイント）の取材で降下するときの回転方向は時計回りとすること。急く余りパイロットが誤って時計回りの反対をし、取材ヘリ同士の接触事故がおきたこともある。

三十年前、スイス・マッタホルンでガラス球（ミラーボール）つき送電線を初めて見た。送電線に飛行機やヘリが引っ掛からないようにする為の安全対策であることをはじめて知る。学生時代、電力工学の講義で何故教えられなかったのか、私が聴き落としたのか、覚えていないが、その頃の日本の空では危険はなかったためと思う。

送電線ではないが、私が小学校の頃、発電所建設資材運搬のための索動の下の道路上には、天板を張って通行人の安全を確保していた。幼い私がこの世で初めて知った人命救助・安全対策の一号と記憶している。

★テレビ朝日報道現業部のころ

ヘリ取材や緊急中継のとき、三三ロメートルの東京タワーに設置されている各社のマイクロ受信基地に障害を与えないようにと、テレビ局同士が注意していたことを思い出す。

また、映像を伝送するには、ミニマイクロ（超小型無線機）が開発され、仕事のやり易さが大幅に向上する、その直後の東京大学会場での共通一次試験（今のセンター試験）速報での話。

東京赤門前の道路は狭いうえに交通渋滞が激しく、ケーブルを張ることは困難であった。ミニマイクロによる無線で映像を送信すれば、警察の指導や近隣のお世話になることなく、ドライバーにも気を使うことなく中継出来た。きめ細かい多元中継が思うままに出来、スピードアップしたのもこの新兵器の開発からであった。

★遡って一昔前のこと

ラジオ静岡（今のSBS）の頃

五十二年前、静岡駅西側の開かずの踏み切りで、閉鎖棒を押し上げて渡ろうとしたことが何回かあった。

雨風の強い日、特に台風襲来のときは、陸橋を自転車を担いで渡るのは元気な私でも風圧で飛ばされそう

になり、動きがとれなくなることがあった。ラジオ静岡へ入社して、単独運転（一人前扱いになること）が認められ、私がスタジオへ入って電気を入れなければ早朝放送が始まらない。そこで危険を犯して遮断機をくぐったのである。しかし、現在の静岡駅西付近は、JRは高架線となり往来自由、又、周辺もすっかり様変わりして、かつての開かずの踏切がどこにあったのか、見当もつかない。

昭和27年 民放第1号「ラジオ静岡」静岡市紺屋町に誕生。

その昔、掛川中学受験の時

六十三年前、品の良い、物静かな市川校長の口答試問で、『飛行機はこれからどうなると思うか』と聴かれた。

私は、航空兵で満期後、大井航空隊の補給廠へ勤務していた武雄兄が『地上と違い、空には障害物がないから飛びやすい』と話していたことを思い出し、即座に「空には邪魔物がないので、飛行機は発達すると思います」と答えた。

勉強のできない私が志願者四百五十名の中から二百人の入学者に入れたのは、この答えが良かったからではないかと、六十五年後の今も思っている。

（二〇〇六年十二月記）

（編集室より）昭和三十年頃、ラジオ静岡と静岡新聞社（同じ建物だったと思います）と、県立図書館葵文庫を見学（遠足）した事を思い出します。新聞社屋上から雪をかぶった南アルプスが見えたように記憶しておりますが……ずい分昔のことですから。

横須賀市在住の大西春雄さんよりの便り

元藤川出身

ふる里通信82号にて、長島ダム接岨湖特集が載っていましたが、ダムの事で思い出し、ペンを持った次第です。

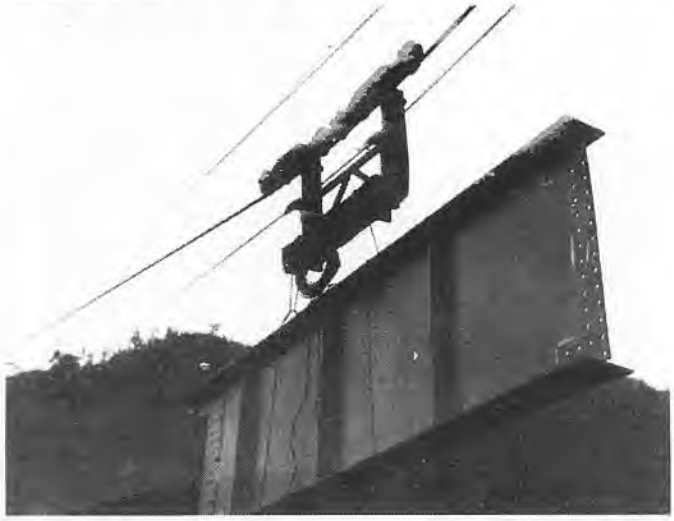
昭和二十五年頃だったと思います。井川ダム工事の時、大井川鉄道で運ばれて来た機材を工事用ロープウェーで井川へ搬送する仕事に、軌道（井川線）が井川まで伸びるまで、積み込みの責任者として従事しました。

その時、長島小学校の裏の長島鎌吉さんの宅にてお世話になりました。

機材は奥泉から舟と車で長島の尾盛（オモリ）まで運び尾盛からロープウェーへ積み込みました。

次からの写真がその時のものです。※

上の写真の対岸（大井川）の吊り橋に水面より機材が引き上げられているように見えます。



※今、長島さんはどこに居られるか知りたいのです。お孫さんは「昭(あきら)さん」と云って当時中学生でした。旧本川根の皆さんに見ていただきたくて写真を送ります。ご存知の方は大西さんにご連絡下さい。

〒00K3 238 横須賀市坂本町五ノ五十一、大西春雄宛

貴重な写真ですから、全て載せました。

↑3人並んでいる中央が大西さん

茶の火入れ

中道正巳

子供の頃、家には茶の手揉みに使う焙炉（ホイロ）があった。畳一帖ほどの大きさで、古い茶部屋に据付けてあった。

底に貼ってある和紙が傷むと、昔、母の生家で和紙を漉いていたので、その和紙の残りを、終戦直後まで父が大事に持っていて、少しずつ補修をしていた。なめし皮のように丈夫で、厚紙と言っていた。

この和紙を裁断する時には、ハサミは使わないで手で裂くのである。繊維が伸びて張り合わせの部分に段差が出来ず平らになるからである。

六月の中旬頃長雨が続くと、ホイロに炭火をいれ、仕上げた茶の火入れをしていた。父と兄が交代で作業をしていたが、特に難しい作業ではないので、手伝いをしたことがある。だが子供の手だとたいへんに熱い。底の和紙に直に触れると、とびあがる程である。しかし、和紙を通した炭火の熱は、茶を焦がすことはない。

冷蔵庫の無い時代、茶箱で仕上げた茶を保管していると湿気を呼ぶ。又は「陽気食う」と言っていた。陽気を食ってからでは遅い。いくら火入れをしても、元には戻らないからである。その前の判断、これが火入れの技術である。

茶の火入れは、茶を焦がす　ほうじ茶とは違うが、焙煎のひとつである。

ところで、ある大手の麦酒メーカーが、新発売の缶入りお茶のCMを流していた。火入れをしながら生葉を蒸す、というもの。火入れとは懐かしい言葉、と聞いていたが、よく考えてみたら、このCMで言っている事は、どんな方法かよく判らない。火を使って葉を蒸すのは、当り前のことで特別なことではない。茶の湯に「火相」「ひあい」という言葉がある。これは火のおこり具合のことで火入れとは違う。そこでメーカーに問い合わせることにした。メールを送ったら暫くして返事がきた。

その内容は、入梅の時季に火入れをした茶葉は美味しい、という昔の人の知恵を参考に、茶葉を蒸しながら火入れをしている、ということであった。……尚更判らない。……つまり、製茶についての伝統の裏付けが無いから、言葉だけ真似しているとしか思えない。個人的にはそう考えた。しかし、それ以上の追求は止めにした。

おわり。

中道さんは、ふる里のつどいにも参加して下さり、そのおりも、お茶の話をして下さいました。お茶をよく知っている方です。

写真、上長尾背戸山より新茶と、大井川、高郷、梅島下、遠く、権現山、塩松山など、無双嶺より連なる山々を望む。

懐かしいあの頃・・・・
昔話のキャッチボール

「地名唄」より

昭和三十年代の地名は、戦後の混乱期の名残と東京オリンピックを迎える高度成長の兆しとが入り混じって、貧しいながらも希望に溢れていた。

そんな時代に少年期を過ごした私たちが、およそ半世紀の時を経て懐かしく思い、当時の記憶を唄として残そうと試みました。この唄が、皆様それぞれの思い出と重なり、懐かしんでいただくと共に、当時の地名のことを子供たちへ語り継ぐきっかけとなれば幸です。

① ゴー！ゴー！ションゴー！　・・・ションゴー＝塩郷

＊でっかい輪っぱの自転車　ジーチャジーチャと風を切る
三角乗りのライダー
やたら重たいペダルで　ヨッコラセッセと汗飛ばし
心臓破りだ　ライダー
さらば地名と別れを告げて　峠を越えたら・・・・・・
ゴー　ゴー　ッー　ションゴー　ゴーゴー　ッー　ションゴー・・・・・
風呂敷マントをなびかせ、ジャンシャカジャーンヒファンファーレ
ヒーロー気取りのライダー
＊足の届かん自転車　ガチャンコガチャンコ必死こく
三角乗りのライダー
デコボコ輪だちの県道、ガタピシダーッと突っ走る
つむじ風じゃん　ライダー
川原の風を体に受けて　ホウキザ過ぎれば・・・・・
ゴーゴー　ッーションゴー　ゴーゴー　ッー　ションゴー・・・・・
貨物列車を追いかけ、グルサングルサンペダルこぐ
レーサー気分の　ライダー
スピード上げ、ジャンジャン橋だ　ゴールはもうちょい・・・・
ゴーゴー　ッーションゴー　ゴーゴー　ッーションゴー・・・・
でっかい輪っぱの自転車　ジーチャ　ジーチャと風を切る
三角乗りのライダー　三角乗りのライダー　〜

② ダイダラボッチ　ダレ？

＊ダイダラボッチはどんな人　ダダラいかい人
ダイダラボッチの足跡は　ふんとに　がとうもない
西村行って見て来ちょう　葛篭へ行って見て来ちょう
ふんとに　ふんとに　おどけるぜん　今じゃ沼だもん
とにかく　いーっかいぜーん
＊ダイダラボッチが寝る時は　枕がい森山
ダイダラボッチが座る時　大森山が椅子
寝返り打って茶畑壊し　夢見るポーズで田を潰す
ダイダラボッチが怒られた　おっかない地名の家に
おーっかないっけ〜
＊ダイダラボッチが行っちゃった誰も知らん間に
どっか遠くへ行っちゃった　誰にも言わないで
ダイダラボッチは一人きり、ふんとにふんとに悲しいね、
ダイダラボッチはどんな人　さすらい者かもね
どこへ　どこへ行っちまっただかや〜、

③ さすらいのチャカリマン

＊みんなが呼んでいるんだよ　早く行かんとお茶がこわくなる
チャッ　チャッ　チャッ　チャッ　チャカリマン　さすらい者よ
今日はヨリスか　明日はい森山　あっちこっち
＊袋はアタシが持たっかやあ　昔の娘が声かける
チャッ　チャッ　チャッ　チャッ　チャカリマン　モテモテ男
午前ハラなら　午後は中ン平　行くのは　どっち

＊新茶は時間が勝負だぜ　素早く　きれいに刈り込むぜ
チャッ チャッ チャッ チャッ チャカリマン　スタミナ男
暗渠上から暗渠下まで　朝から　いっき
＊雨さえ降らんきゃいつだってやる気満々　刈るのが男だぜ
チャッ チャッ チャッ チャッ チャカリマン　大丈夫なからだ
芽採り　裾刈り　均し深刈り　何でもOK

④ 地名・・・その記憶

ああ・・・忘れない　ああ・・・あの頃のこと
ああ・・・今は無い　ああ・・・記憶の彼方
＊峠から眺めてた　うさぎ島の最後　イェー
黙って立ち尽くして　ただ・・・涙
ああ・・・うさぎ島　ああ・・・心を込めて
ああ・・・ありがとう　ああ・・・感謝を込めて
＊朝から聞こえてた　ドレッシャーの響き　イェー
風が運んだ　石炭の・・・匂い
ああドレッシャーに　ああ・・・心を込めて
ああ・・・ご苦労さん　ああ・・・感謝を込めて
＊オモチとお祭りの　出店のオヤジたち　イェー
騙しても騙されても　指折り・・・待った
ああ・・・忘れない　ああ・・・あの頃のこと
ああ・・・今はない　ああ・・・記憶の彼方
＊マブチのモーターを　頼んだオヅダさん　イェー
アサリ屋さん当日のオジさんも　懐かしの人
ああ・・・あの峠の　ああ・・・あの人達に
ああ・・・ありがとう　ああ・・・心を込めて
＊毎日唸ってた　レンガの発電所　イェー
大声で交わした　明日の・・・約束

――ドレッシャーとは、水路に入った土砂をかきおろす機械――
――うさぎ島は、地名峠から見渡せる、大井川にできた半人工的な島で、地名発電所の取水堰堤と続き、木床などを作る製材所もありました。昭和34年の伊勢湾台風の大洪水時にうさぎ島は流出しました。――

ああ・・・発電所に　ああ・・・心を込めて
ああ・・・お疲れさん　ああ・・・感謝を込めて
＊水路と橋とタンク　トロッコと堰堤　イェー
地名は地名中も　遠い遠い記憶
ああ・・・忘れない　ああ・・・あの頃のこと
ああ・・・今は無い　ああ・・・記憶の・・・かなた

⑤ 人生鵜山の七曲り

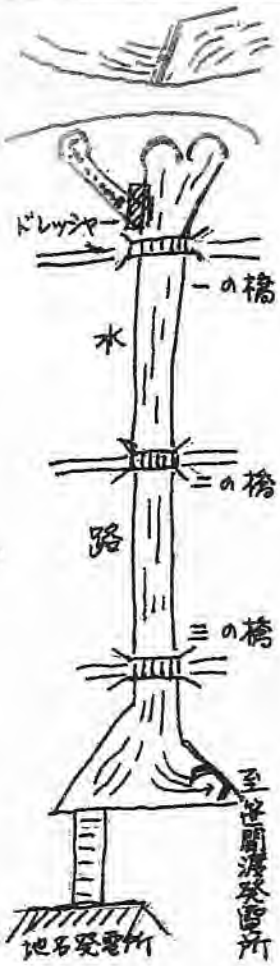
＊庚申さんの暗いお堂で　賽銭代わりに　小石をほかして
もらった団子が懐かしい
バチも当たらず　こうして今じゃ　でっかい子もいる　酒飲み親爺
いろんな事が　あったけど
めぐり廻って　過ぎた日々は　泣いて笑って流れた日々は
鳴呼・・・人生鵜山の七曲り
＊学校帰りは　何時も寄り道　柿の実盗んで　あぜ道逃げた
親父にげんこつ　べそ掻いた
あれから幾年　過ぎたけど　まじめな顔して　堅い勤め人
昔をつまみに　酒を飲む
水車小屋のツララを取ろうと　伸ばした体の　足が滑って
気が付きゃ景色も　回ってた
今宵の酒は　昔をつまみに　飲んではしゃいで　語ろじゃないか
やがて心は　あの頃へ
上って　下って　超えた日々は　幸せ不幸　まだらの模様
鳴呼・・・人生鵜山の七曲り
＊大井神社の　お祭りの日に　森に響く　高い笛の音は
弓矢が的を　射た知らせ
歳を重ねた爺さんたちの　弓引く姿が　輝いていた
いつか俺もと　思ってた

走りつまずき 過ごした日々は、時に追われて 記憶はかすれ
嗚呼・・・人生鵜山の七曲り
＊何時も故里心を包む 田んぼと山と 大井の流れ
茶畑と人 深情け
上って下って 超えた日々は 幸せ不幸 まだら模様
嗚呼・・・人生鵜山の七曲り
めぐり廻って 過ぎた日々は 泣いて笑って 流れた日々は
嗚呼・・・人生鵜山の七曲り

⑥ 一の橋 二の橋 三の橋

焚き木を背負ったおばあちゃん足元見ながら渡ってく
早く行かんと日が暮れる ドレッシャーガラガラ一の橋
スイカが流れた追っかけろ 白い子犬もはしゃいでる
チリンチリンと鐘の音 キャンデー買いに二の橋
ボトトンボトトン車が通る オット危ない薬屋さん
背中の荷物の紙風船 僕にも頂戴 三の橋
川原へグミ採り一の橋 灯篭流した二の橋
指切りげんまん三の橋 あしたのお土産タコ三つ

一の橋 二の橋 三の橋 今じゃ水も無い橋も無い
一の橋 二の橋 三の橋 今じゃ水も無い橋も無い



⑦ オイッチョ一口ブギ

オーイッチョボロボロ　〈　〈　〈
オイッチョボロ　オイッチョボロ　ウー
＊メンジイ捕りクビッチョ　アカガネ売っぱらって
学校よりトロッコ 泥棒ごっこ 戦争ごっこ 爆発 炸裂 28弾
ゴムケン 手裏剣 飛びあす肥後の守
杉鉄砲 ジュウゴ鉄砲 忍者にハリマオ
背負子の 竹ゾリで オイッチョボロ
服はボロボロ 青っぱなダラダラ 親はハラハラ
思い出ボロボロ オイッチョボロ

オーイッチョボロボロ　〈　〈　〈
オイッチョボロ　オイッチョボロ　ウー
＊ペッタン カッチン 棲家に隠して
コーロン浸せば 又マッパイ ジンジッパイ 渡船場 下ァクリ
ガンガン飛び込みや 頭打ってタンコブ
エッチュー一つで イミチを流れて
ザーザーで 引っかかって オイッチョボロ
服はボロボロ 青っぱなダラダラ 親はハラハラ
思い出ボロボロ オイッチョボロ

オーイッチョボロボロ　〈　〈　〈
オイッチョボロ　オイッチョボロ　ウー

地名出身の地名をこよなく愛する方が、時として帰って来て、自作自演ギター弾きがたりを披露されるという。何と、学童、学生時代の思い出を豊かに、表現されている事でしょう。地名弁独特の言いまわし、地名の人だけ判る地名もありますが、想像力を高めて、口ずさんで下さい。きっとあなたのコンサートがお来ますね。

長い長い冬ごもりから春眠暁をおぼえずにずれ込み、青葉の輝き、雑草の息づかい、太陽のまぶしさに、ようやく我に帰り、進まぬ原版づくりに再度の挑戦を致しまして、何とか、発刊に漕ぎつけました。早くから原稿をいただいておりました寄稿された方々、又、発刊を心配して下さった皆様本当に申しわけありませんでした。今回の発刊は、二月のふる里のつどいが終って間もなくとりかかりはしましたが、家業のことで諸問題をかかえ、対応におわれ、すっかりつかれ切ってしまい、時間がすぎさってしまいました。ただ、今、考え直してみますと、やれない理由をさがしてあとまわしにしていたが感があります。後悔しています。今回号は、出来上りがよくないと思われる方もいらっしゃると思いますが、今後挽回する期間をお与え下さい。84号は、なるべく早く発刊したいと思います。

＝定期購読のお願い＝

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　〒共200円

皆様の定期購読が、このふる里通信の発行を支えます。年4回の発行を予定しております。おおむね季刊誌です。

購読料が切れた方、初めてふる里通信をご覧いただく方には、郵便振替用紙を同封致しますから引き続きご購読いただきたくお願いします。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも、是非、ご連絡下さい。

発行責任者 〒428-0313
静岡県榛原郡川根本町上長尾859-6
小沢節子
TEL 0547-56-0015
FAX 0547-56-0020
郵便振替口座 00870-4-81556

新しい年を迎え、一月中旬からぐんぐん温くなり霜も氷も見られない日々が続きました。梅の花もいつになく早く咲き、時季をとりちがえたツツジ類が咲き、やっぱりは異常だ"を感じながらも、すごしやすい冬となり、暖房費節約、体にもいい、と喜んでいました。気象庁も、桜の開花予想を三月十四日静岡第一番を発表しました。

ところが、三月六日(予想発表の次の日)から冷たい雨が降り続き、低温、冬がやってまいりました。やっと大陸から冬将軍がせめて来たのです。もちろん、三月十四日の桜の開花は、なりませんでしたが、山々の木々の芽吹きはいつになく早く、ダンコウバイやキブシ、ヤマザクラ、など春をつげる花が咲きはじめました。

そして、里の桜は、時季の調整ができなかったのか、四月はじめから、二週間ほど花見がお楽しました。高郷の土手の桜は、ここ数年で一番の見事な花が咲きました。徳山桃沢の桜は、しだれ桜と重なり、花見見物は大にぎわいでしたが、今一だったようです。もりの泉から見る山桜は、三月二十日頃がよかったようで、テレビで満開放送があった時にはすでに葉桜となっていました。

今年のアカヤシオは、例年よりも遅く、ゴールデンウィークが見ごろとなり、訪れた人々の目を楽しませてくれました。花の色もいつになくきれいでした。地球温暖化現象の一言でかたづけられるものでもありませんが、五月十日、午後、山大段に雪が降り、咲いていたコメツツジの花を全部落としてしまったとか、春雷も多く発生したとか、自然条件が変動期に入っているのかも知れませんね。